

第三の開国期に思う



佐伯 基憲
日本ユニシス
顧問

混迷を深める日本はいま、第三の開国期と言われるが、最近では幕末から明治の歴史をひも解くことが多い。

1853年7月8日の昼下り、ペリー率いる黒船4隻が浦賀沖に姿を現したことはよく知られているが、航路や日数、燃料の調達までを知る人は少ない。

ペリー艦隊は、米国東岸を出て大西洋を横断、喜望峰を回り、約7ヵ月半かけて浦賀にやって来た。この長い航海の燃料（石炭）を供給した会社が、今回の私の思い出の写真に関係している。

この写真は、1991年11月5日、ロンドンのLincoln's Inn Great Hallで開催された、The Peninsular and Oriental Steam Navigation Company（以下P&O）のGroup Management Dinnerのスナップで、同社社内誌に掲載された写真である。

P&Oはヴィクトリア女王の勅許状を受けて1840年に法人化された海運会社であり、このP&Oがペリー艦隊の石炭を供給していた。

私は1991年9月から1年余り、三井物産からの交換研修員として、P&Oに出向した。当時のP&Oは約240社の関係会社を有する企業集団で、欧州



『出迎いのP&O Lord Sterling会長と握手』

全域から抽出された43社、約330名のマネジメントにお会いし、経営者としての理念や哲学、信条、事業戦略に真剣に耳を傾け、自らの成長の糧とした。

このディナーは約250名のグループ幹部が一堂に会する年1回の大イベントで、全員がタキシードに蝶ネクタイで出席する。この会への招待状は社員の誇りであり、私も心地よい緊張を覚えるとともに、英国経営者の考え方や振る舞いなどを知る絶好の機会となった。

P&Oでの学びは、両社に対する感謝の念とともに、いまでも私の経営信条の中に生きている。